

## 仏教と「スピリチュアリティ」に関する 一考察

新田 智通

近年「スピリチュアリティ（霊性）」という概念が生の意味やその充実に関係するものとして広まりつつある。それは、宗教の違いや信仰の有無さえも問題とならないような、現代人の必要に則した普遍的概念と捉えられている。

その「スピリチュアリティ」という概念のもとでは、心理学の手法を取り入れつつ、「心のケア」や「癒し」の実践がなされているのだが、最近では仏教などの伝統的宗教に属する宗教者のなかにも、そうした活動に参加しようとする傾向が認められる。そして仏教者によ

るそうした試みの由来をたどると、近代西洋との邂逅を通じて生じた、十九世紀後半における仏教のある変化に行き着く。

「スピリチュアリティ」という言葉とともに展開している現象は、すでに一九七〇年代末から「ニューエイジ」などという語とともに広まりつつあった。それは個々人の「自己変容」や「霊性の覚醒」を目指すとともに、霊性を尊ぶ新しい人類の意識段階や文明の形成に貢献することを目指す運動群である。それはまた、近代合理主義でもなく宗教でもない「第三の道」を示すものであり、科学との親和性が高く、特に一部の心理学は、それに科学的根拠を与えている。さらに「修行」や「救済」よりも「癒し」が中心的テーマとなっており、それは「悪の实在の否定」という考え方も結び付いている。加えて、固定的な教義や教団組織などをもち、個々人の自発的な探求や実践に任せる傾向が強いとされる（この段落の内容は、島蘭進著『精神世界のゆくえ―宗教・近代・霊性』による）。

そうした「スピリチュアリティ」という概念の源流にあるものと仏教とが出会うことで、これまでになかった新たな仏教が十九世紀後半のスリランカにおいて誕生した。リチャード・ゴンブリッチとガナナート・オベーセーカラによる『スリランカの仏教』では、その新たな仏教は「プロテスタント仏教」と呼ばれている。この仏教運動は、「個人の究極目標を仲介者なしに探し求める」という特徴をもつ。その結果としてスリランカ仏教では、精神的な平等主義と並んで、儀礼を軽視し個人の心の内面を重視するという、宗教の個人化・内面化が進んだ（そしてこれと関連したこととして、第二次世界大戦後に、スリランカを含む上座仏教国において、在家による瞑想が広く実践されるようになった）。またそうした傾向は、スリランカ仏教を在家中心主義に傾斜させた。またこの運動を通して、仏教は宗教ではなく哲学、あるいは科学であるという考え方が広まった。

ドナルド・ロベスもまた、彼の『近代仏教の必読

書』という著書のなかで、十九世紀後半のスリランカにおける仏教の変化に注目している。彼はそこに、伝統的な仏教とは一線を画した「近代仏教」の嚆矢を見いだしている。彼の言う「近代仏教」には、かつての仏教における儀礼や呪術的なものに対する否定的見方や、平等性や普遍性の強調、個人の重視といった特徴がある。また、それは自らを、新たな仏教としてではなく、ブッダのものとメッセージへの回帰と捉え、かつ、ヨーロッパ啓蒙思想において理想とされた「理性・経験主義・科学・普遍主義・個人主義・寛容・自由・宗教的権威の否定」といった価値と高い親和性をもつ。さらに女性の果たす役割が大きく、指導者の多くは在家信者で、出家と在家の区別が曖昧である。加えて、瞑想の実践を非常に強調する。「近代仏教」の担い手とされる者の中には、ヘンリー・オルコットなどの神智学関係の者や、スリランカやインドにおける仏教改革運動・復興運動に従事した者、また「エンゲージド・ブダイズム」（社会参加仏教）に携わったと

される者、アメリカにおいて仏教と関わりをもった者などが多く含まれている。なおロベスが「近代仏教」として提示している新しい仏教を、デイヴィッド・マクマハンは「仏教モダニズム」という言葉で表現する。

こうした新たな仏教がこんにちもつとも盛んな国の一つはアメリカである。ケネス・タナカの著書、『アメリカ仏教―仏教も変わる、アメリカも変わる』によると、仏教が初めてアメリカに伝わった十九世紀中頃以降、アメリカにおける仏教徒の数は増加し、現在では約三〇〇万人にのぼるといふ。それに加えて、「仏教徒」ではないが仏教に共感を抱いている「仏教同調者」なども多数いるとされている。そのアメリカ仏教には、平等化、瞑想中心、参加仏教（エンゲージド・ブダイズム）的、超宗派的、個人化宗教、といった諸特徴が認められる。また、やはりアメリカ仏教でも、仏教は科学との親和性の高いものとして理解され、とりわけ近年は、仏教と心理学の連携を模索する動きが顕著であるといふ。また、来世への関心が希薄となり、

「この世」や「今」が重視されるのもアメリカ仏教の一つの特徴である。

ところで、アメリカ仏教の特徴としても挙げられている「エンゲージド・ブダイズム」という言葉が広く流布するようになったのは一九九〇年代以降のことであるが、その概念が指す具体的事象は、やはり十九世紀後半のスリランカにまで遡るとされる。またエンゲージド・ブダイズムの代表的な実践者とされる、アンバードカルやテイク・ナット・ハンなどは皆、ロベスが「近代仏教」に関わったとして取り上げている人物である。

サリー・キングによると、エンゲージド・ブダイズムは、社会や経済、政治、環境に関する諸問題に参加する仏教運動であり、単一の創設者がいるのではなく、それぞれの国の問題に応じた個別の活動のうちに生じたとされる。それはまた、非暴力を原理とした行動主義的な運動である。さらにそれは、「近代仏教」などの特徴とされているような、個人の内的な精神的探求

という側面とも深く関係している。キングは、エンゲージド・ブディズムを「仏教のスピリチュアリティの表現」と捉え、そこにおいては、「スピリチュアルな探求と社会活動のバランス」が重視されており、前者を基盤とし、その自然な結果として後者が現れるのだと述べている。

以上のように、新たな仏教の流れに見られる諸特徴の多くは、「スピリチュアリティ」という概念を基軸として展開している現代の様々な運動（島菌の言う「新靈性運動」）の特徴と重なる。いま日本においても、この「スピリチュアリティ」という概念を取り入れつつ、心理学とも協同しながら、仏教的実践法を「心のケア」や幸福感の実現などのために役立てようとする取り組みが急速に広まりつつあるが、それもまたこうした一連の流れの延長線上に位置するものと見て間違いないであろう。

もちろん、新しい運動であるという理由だけで、そうした新たな仏教が否定されるべきではない。しかし

それでも、それが本来的な意味で「仏教」と呼ばれ得るのか否かについては、今後の慎重な検討が求められる。例えば、新たな仏教の流れに認められる個人化、内面化、心理学化という傾向は、「善悪」といった、仏教において決定的に重要な問題までも「個人の心の問題」として相対化してしまう危険をはらんでいるように思われる。そうした問題をはじめとして、検討されるべき点は少なくない。

なお、本発表のフルペーパーは、若干タイトルを変更したうえで、近く刊行予定の、大谷大学佛教学会の学会誌『佛教学セミナー』第一〇〇号に掲載される予定である。

（本学講師 仏教学（インド））

〈キーワード〉プロテスタント仏教、近代仏教、

エンゲージド・ブディズム